

教師の役割

1. 教育を考える一言

「私はどんなに小さい子供をみても、自分より優れているところがあると思っている。
人は誰も私より優れている。」

2. 背景

この言葉は、誰のことばであるのかは分かりませんが、インターネット上で見つけた言葉です。学校では、教師と生徒という2つの立場があります。基本的に、教師は「教える側」、生徒は「教えられる側」となります。教師の方が知識や経験が豊富であり、そのような役割はもちろん適当だと思います。しかし、教師が自分の立場を「教える側」として固定し過ぎてしまうのは、危険なことではないでしょうか？そのことについて考えるきっかけを与えてくれたのがこの言葉です。

3. 考察

私は、実際に教壇に立ったのは教育実習の3週間だけですが、大学1年生からの4年間、小学生にサッカーを教えてきました。その中で思ったことは、自分が経験したり、考えたりした範囲のことしか子どもたちに伝えることができないということです。子どもたちにとってためになること、と思って話していても、結局は自分の考えでしかないのです。自分が子どもたちに伝えていることは、本当に正しいのかどうか、自分の価値観を押し付けているだけではないのか、いつも不安になります。今はその不安が大きいので、自分が子どもたちに何を伝えたのか何度も振り返ったり、いろんな人に意見をもらったりしています。将来教師になり、子どもに何かを伝えるということに慣れてくると、それが当たり前になっていくと思います。今は不安だからという理由で、自分の行いを振り返っていますが、今後は、何が生徒のためになるのかをしっかりと考えられる教師になりたいです。「教える」立場に固定されず、いろんな人からたくさんのことを教えてもらい、子どもたちの声にも真剣に耳を傾けられる教師になりたいと思います。

子どもたちは、大人が考えるよりもはるかに多くのことを知っていますし、しかも自分なりに考えています。子どもたちへの認識について考えるきっかけとして、私は『スヌーピー全集』をお勧めします。この本では、たくさんの子どもたちが登場しますが、彼らの日常や大人に対する考え方にはハッとさせられます。もちろん作者は大人ですから、完全に子どもの視点から描かれているわけではありませんし、実際に子どもたちがこんなにも深く物事を考えているかは分かりません。しかし、子どもは「教えられる」だけの立場であるという認識について考え直すきっかけになると思います。

引用参考文献

チャールズ・M・シュルツ（谷川俊太郎訳）『スヌーピー全集 1～10』角川書店、2000年